【ポスター発表】

介護福祉士の職場定着促進要因に関する研究

―半構造化面接調査から得られたテキスト・データを用いて―

○　川崎医療短期大学　　氏名　森本　寛訓（5813）

橋本　勇人（川崎医療短期大学・3560）、藤原　芳朗（川崎医療短期大学・5221）

キーワード３つ：介護福祉士，職場定着，半構造化面接調査

１．研究目的

介護福祉士が国家資格として制度化されてから約 20 年が経つ。介護福祉士への社会的ニーズはますます高いといえるが，介護福祉士の就労環境は厳しく，様々な調査で職場に定着できない介護福祉士の現状が報告されている。介護サービスは介護福祉士と介護サービス利用者(以下「利用者」とする)との対人関係を基盤として行われる。したがって介護福祉士は利用者との信頼関係を結びながら介護サービスを提供する。利用者との信頼関係が円滑に構築されるためには，介護福祉士が継続的に職場へ定着していることが必要条件となろう。さらに介護福祉士が職場に定着することは，介護福祉士自身の職業生活の質を向上させるためにも欠くことのできない条件であるといえる。筆者らは 2009 年度から 2011 年度にかけて介護福祉士の職場定着について取り上げ，その促進要因を探索することで介護福祉士の職場定着を促す方策について検討した。

２．研究の視点および方法

この研究では介護福祉士の職場定着を勤務年数の長さと職務満足によって把握した。そして勤務年数が長いとみなせる介護福祉士の職務満足にプラスとなるエピソードを介護福祉士の職場定着促進要因と定義し，研究を進めた。さらに本研究では介護福祉士の職場定着促進要因をライフコース場面（「学生生活」，「職業生活」，「私的生活」）のエピソードから探索し，ライフコースの流れに沿って分析することで，介護福祉士の職場定着を促す方策を提案する。

本研究は 2009 年度から 2011 年度にかけて行われた。そして 2009 年度と 2010 年度には自由記述式または評定式の調査票を用いた調査を実施した(森本・吉武・橋本,2011,2012)。今回の発表では 2010 年度までに明らかになった介護福祉士の職場定着促進要因について，2011 年度に実施した半構造化面接調査により検討した結果を報告する。

2011 年度の半構造化面接調査は 2011 年 10 月から 12 月にかけて 2 カ所の特別養護老人ホームに勤務する現職の介護福祉士 33 人に対して行われた。面接調査は各特別養護老人ホームの 1 室で行われ，1 人にかかる時間は約 30 分であった。面接内容は IC レコーダーで録音し，のちにテキスト化して整理した。

３．倫理的配慮

本研究を行うにあたり，まずは川崎医療短期大学倫理委員会の審査を受け承認を得た。

さらに面接調査を行う際は事前に面接対象者に研究および面接調査の概要を説明し，面接調査参加への同意を得た。

４．研 究 結 果

2010 年度までの調査で明らかになった介護福祉士の職場定着促進要因には次の内容(エピソード）が挙げられる。養成施設期間では「印象に残る授業・実習（学生生活：実習で現場の雰囲気を知ることができた)」と「印象に残る友人（クラスメート）との関係（学生生活：今でも仕事のことを相談できる友人ができた)」および「家族の介護（私的生活：家族（祖父母など）が病気になったときに，介護の知識が役に立った)」であった。勤務年数 1 年以上の期間では「介護職としての就職（職業生活：「その事業所に就職して良かった」と思えた)」,「資格取得（職業生活：ステップアップするために介護にまつわる資格（ケアマネージャーなど）を取得した)」,「職位の変化（職業生活：主任（または副主任）に抜擢された)」,「配置転換（職業生活：職場の異動で他の職場メンバーとの交流が増えた)」,「印象に残る他職員との出会い（職業生活：信頼できる職場メンバー（上司など）に出会った)」,「印象に残る利用者との出会い（職業生活：利用者が私のことを覚えてくれた)」,「印象に残る利用者のご家族との出会い（職業生活：利用者の家族から感謝された)」,「待遇（給料，復職，勤務希望）（職業生活：ふだんの働きが認められて給料が上がった，休職した後の復職がスムーズにできた，シフトの調整で自分の希望が通りやすくなった)」そして「友人との関係（私的生活：職場の同期の友人と交流した)」であった。

以上の内容を面接調査において面接対象者自身の体験に当てはまるか否かを尋ねた。テキスト化された面接内容を確認した結果, 2010 年度までに介護福祉士の職場定着促進要因として挙げられたエピソードのほとんどを確認することができた。

5. 考 察

結果より 2010 年度までに明らかになった研究成果の妥当性がほぼ認められたと考えられる。したがって以上に挙げられたエピソードに留意し，介入してゆくことが介護福祉士の職場定着促進につながると考える。例えば「印象に残る授業・実習」に留意すると，介護現場の雰囲気を良く理解してもらうことに一層重心を置いた内容で構成すること，また面接調査から得られた付加的な回答より，介護福祉士の役割および介護現場に対して良いイメージをもってもらえる，そしてそのためにも厳しすぎない実習にする工夫も介護福祉士の職場定着を促進するひとつの手段になると考えられる。

今回の面接調査から 2010 年度までの調査では把握されなかった介護福祉士の職場定着促進要因（例えば「体の健康（介護に従事できる健康，体力があるということ)」）もあることが推測された。今後は面接調査のテキスト・データを考慮しつつ介護福祉士の職場定着促進について考察を深めてゆきたい。

本研究は科学研究費補助金（21530647）の助成を受けて行われた。